

## つれづれなるままに新型コロナ問題を思う

早朝、鶯のさえずりが賑やかな明るい季節が到来し、ソメイヨシノの開花も間近い3月29日(日)、この相馬地方も季節外れの寒さとべた雪に見舞われた。

連日、新型コロナウイルス関連のニュースがTV画面と新聞紙面を席卷している。

3月に開催予定だった新地支部総会と4月の仙台支部総会は、延期になった。

1903年に始まった馬城会の歴史は、奇しくもアメリカのライト兄弟が人類で初めて離陸できた動力飛行機の歴史と丁度重なる。およそ百年前、大洋を渡る手段は船だけであり、限られた人たちだけが大変な時間をかけて他の国に行くことができた。

今や、世界は狭まり、この百年で、年に十数億人が航空機で往来する社会へと大きく変貌した。

地球上の生命の歴史は38億年になるという。それ以来、生き物は、多様な種への進化と種の絶滅を繰り返しながらも、「生命というもの」は、一度も途切れることなく続いてきた。

「生命」は、環境に柔軟に適応し変異する特性ゆえに38億年も続いているのだろう。

類人猿と人類の祖先が別れたのは、諸説あるが500万年前程度だと言われている。

現在、はびこりつつある人類の祖先も、地球上の生物としては、全くの新参者である。

例えば、地球の生命の歴史を1年とすると、人類の祖先でさえ、地上に登場したのは12月31日になってからである。

歴史で学ぶ4大文明や縄文時代はというと、12月31日午後11時59分以降の僅か1分にも満たない時間なのである。

産業革命以後、20世紀になってから、人類は膨大なエネルギーを消費する生物になった。

その結果、わずか百年ほどで、温暖化はじめ地球全体の環境の変化が顕在化するようになった。

21世紀になって、SARSやMERSというコロナウィルスの登場、今回の新型コロナウイルスの急激な拡散は、この百年足らずの、人類の自然破壊と交通網のスピード化による必然なのであろう。

今回の問題は、限りなく便利さを追求してきた私たち人類の欲望に、そして、旧来通り、経済優先、自国優先、仮想敵国をつくって治めてきた政治家たちに、大いなる自然界が警鐘を鳴らしているできごとなのかもしれない。

「人類よ！奢るなかれ」と。

21世紀は、生命の柔軟性と多様化の歴史から見て、新しいウィルスは、次々と生まれ、人類の活動のお陰で、あっという間に、拡散するだろう。

もう一度、人類は、地球上にごく最近生まれた生物の一種であるという原点に戻る必要がある。ウィルスに国境は無い。

国どうして争っている時代ではない。

今回の問題が、人類に新しいパラダイムシフトを生むきっかけになればと思っている。